文書館
レキシノオト

「音」で読み解く
防長の歴史

♪9

「音楽雑誌　第56･57･58･60号」（今井家文書146 ～ 149）

生活ノオト①

『音楽雑誌』～わが国最初の音楽専門雑誌～

【『音楽雑誌』について】

『音楽雑誌』は明治23年（1890）9月から明治31年2月の第77号まで発行されたわが国最初の音楽専門雑誌です。

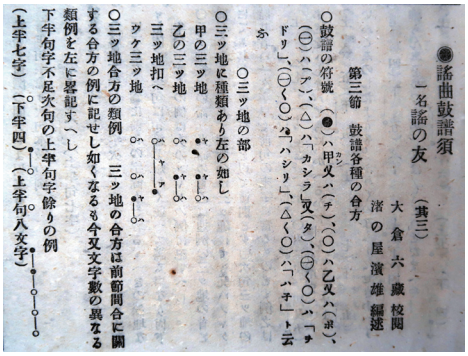
創刊者は四竈訥治（しかまとつじ）で、音楽雑誌社から発行されました（第60号以降は共益商社）。当館は、明治29年発行の第56 ～ 58号･60号の4冊を所蔵しています（写真上）。

その内容は、音楽に関する提言、西洋音楽理論の講義、新譜の紹介、宮中における歌会の和歌、楽器の奏法、音楽会の情報、各楽団の活動報告、人物紹介、諸広告類など多岐にわたり、当時の音楽を取り巻く状況を見て取ることができます。『音楽雑誌』の紙面から明治20年代末の音楽状況を見てみましょう。

【邦楽の状況】

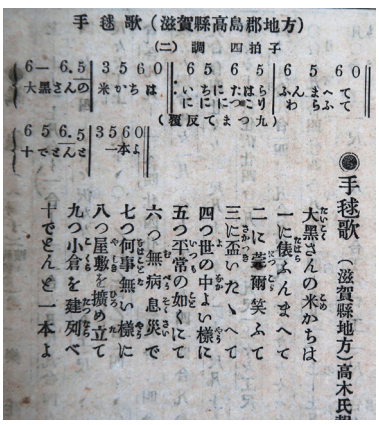
『音楽雑誌』では西洋音楽の啓蒙普及ばかりでなく、邦楽の情報も数多く紹介されています。

右上は謡曲の鼓譜です。伝統的な邦楽の表記法で打ち方が解説してあります（第57号）。


●謡曲鼓譜須
一名謡の友（其三）
大倉六藏校閲
渚の屋濱雄編述
第三節　鼓譜各種の合方
○鼓譜の符號（●）ハ甲又ハ（チ）、（○）ハ乙又ハ（ポ）、（⊖）ハ（ア）、（△）ハ「カシラ」又（タ）、（⊖〜○）ハ「チドリ」、（⊖〜○）ハ「ハシリ」、（△〜○）ハ「ハチ」ト云ふ
○三ッ地の部
○三ッ地に種類あり左の如し
甲の三ッ地
乙の三ッ地
三ッ地扣へ
ウケ三ッ地
○三ッ地合方の類例　三ッ地の合方は前節間合に關する合方の例に記せし如くなるも今又文字數の異なる類例を左に畧記すべし
下半句字不足次句の上半句字餘りの例
（上半七字）（下半四）（上半句八文字）

【わらべ歌・数え歌】

滋賀県高島郡地方の手毬歌が紹介されています。五線譜ではありませんが、数字譜で音階が示されています（第56号）。


手毬歌（滋賀縣高島郡地方）
（二）調　四拍子
6－6.5 | 3560 | 6565 | 6560
大黒さんの米かちは　いちにたはらににつこり　ふんまへて　わらふて
（覆反てまつ九）
656.5 | 3560
十でとんと一本よ
●手毬歌（滋賀縣地方）高木氏

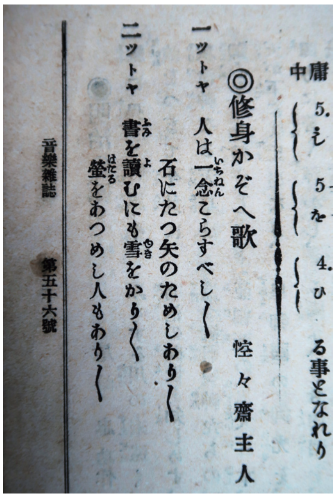
○勇壯活潑なる軍歌軍樂
○紙腔琴
●西川製オルガン
●紙腔琴製造元祖十字屋
東京銀座三丁目貳番地
（明治廿五年三月廿六日遞信省認可）

「紙腔琴」
（今井家文書 147）

広告の中に「紙腔琴」（しこうきん）という一風変わった機械があります。

これは、明治時代後半に流行した手動式の自動演奏装置で、手前のハンドルを回すと、紙にあけられた音譜が読みこまれ曲が流れます。

レコードの普及以前ならではのものと言えるでしょう（第 57 号）。

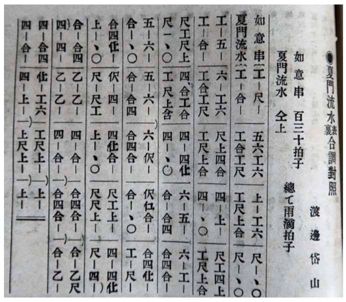


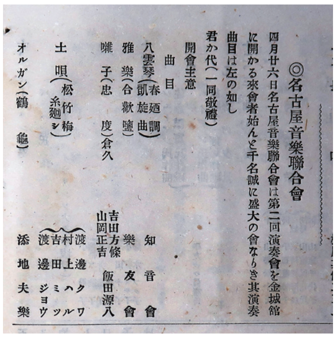
左は「修身かぞへ歌」です。明治20年代後半、「～数え歌」と称し、子供たちに徳目を教える教育唱歌が盛んに作られました。数え歌は、既に定まっていたメロディーに歌詞がはめこまれて数多くの替え歌が作られました。これもそのうちの一つです（第56号）。

【明清楽】

明治時代、中国の民間音楽である明清楽（みんしんがく）が流行しました。それを示すように、『音楽雑誌』にもその楽器である清笛や月琴の楽譜が掲載されています。右は月琴の楽譜です（第56号）。

明清楽の流行は日清戦争を機に衰えました。



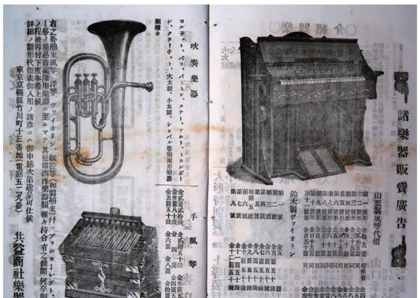


【音楽会のプログラム】

各地で開催された音楽会のプログラムも多数掲載されています。これは名古屋音楽連合会のプログラムで、洋楽と邦楽が一つのコンサートの中で混在していることが分かります。

その他、「幻燈音楽会」と称して、写真をスライド上映しながら演奏する、珍しい音楽会の記事もあります（第58号）。

【バイオリンは庶民の楽器】



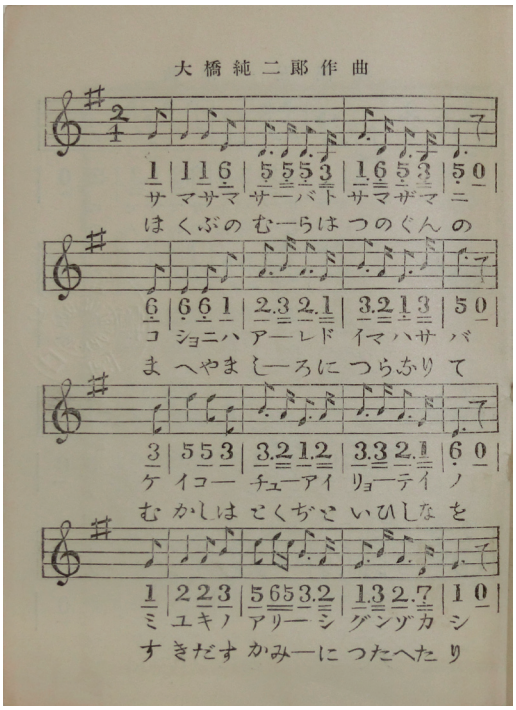
当時、楽器の値段はいくらぐらいだったのでしょう。『音楽雑誌』に掲載されている楽器の広告から、その値段を知ることができます（第58号）。

山葉（現ヤマハ株式会社）製の風琴（オルガン）が15円～ 150円。オルガンは、当時、大変貴重で個人の家で持つことは一般的ではありませんでした。また、学校への普及もごくわずかでした。それに対して、鈴木バイオリン社（現鈴木バイオリン株式会社）製のバイオリンは5円～ 12円50銭の価格帯で、今は高尚な楽器のイメージがあるバイオリンの方が、親しみやすい西洋楽器でした。このことは、バイオリンの教則本やバイオリンの楽譜などがたくさん残されていることからも窺えます。

その他、手風琴（アコーディオン）は2円20銭～ 10円の価格帯でした（第58号）。

左は明治26年に刊行されたバイオリンの教則本です。バイオリンの持ち方から始まり、図入りで弾き方が解説してあります（上下とも木梨家文書608）。

右は大正3年（1914）に刊行されたバイオリンのための楽譜です。曲名は「箏曲　越後獅子」で、「ヴァイオリン音譜」と書かれています（亀田家文書172）。中尾都山による邦楽の五線譜化の試みの一つでした（シートNo.30参照）。



文書館レキシノオト

「音」で読み解く
防長の歴史

♪10

「地理歴史防長唱歌　第弐集」（文書館図書767）

生活ノオト②

地理歴史防長唱歌（明治34･36年）

【防長唱歌】

『地理歴史防長唱歌』は、山口県内各地の歴史、地理を歌詞に取り入れた唱歌です。裏面にその一部を示していますが、まず県全体の概要を歌詞にし、続いて大島郡、玖珂郡、熊毛郡……という順で郡別に詞を作り、各郡の様子を紹介しています。各地の地理（山･川･港･海岸など）、寺社･駅･産業や産物、重要な史跡、地域の歴史などが端的に、かつリズミカルに歌われているのです。

本書は、県全体と大島･玖珂･熊毛･都濃郡を扱う第１集が明治34年(1901）１月、佐波･吉敷･厚狭･美祢郡を扱う第2集が明治36年1月に刊行されています（発行は徳山町維新堂書店）。豊浦･大津･阿武各郡と下関市を扱う第３集は、第2集刊行時に「近刊」とされていますが、実際刊行されたかは不明です。

明治34年2月14日の「防長新聞」掲載の「防長唱歌」の広告には、「一唱の中に知らす識らす防長の地理歴史を記臆することを得べし、以て唱歌教科書とすべく、以て郷土地理歴史参考書とすべく、又以て旅行案内とすべし」とあります。

「防長唱歌」第１集は県立山口図書館、第２集は当館が所蔵しています。県内図書館や個人宅で保存されているものもあるかもしれません（たとえば年光保秀「郷土歌『防長唱歌･都濃郡の部』」『徳山地方郷土史研究』7参照）。

「汽笛一声新橋を」で知られる「鉄道唱歌」が出来るのが明治33年5月。明治30 ～ 40年代、各地でたくさんの地理教育唱歌が作られました。鉄道唱歌のほか、郷土を歌った郷土唱歌や、日本全体、世界･外国を歌った唱歌もありました。「防長唱歌」は郷土唱歌と呼ばれるタイプのものです。明治期の唱歌を集めた『唱歌教材目録（明治編）』（国立音楽大学編）にも未収録のようです（参考：山口幸男「明治期における地理教育唱歌について」）。

【作詞者富田武一】

「防長唱歌」の作詞者は、徳山中学校教諭富田武一、作曲者は山口県師範学校教諭大橋純二郎です。第２集には都濃郡戸田村立桜田高等小学校校長淺田五一作曲の楽譜も掲載されています。

富田武一（『岩国高等学校九十年史』より引用）

「防長唱歌」作詞者の富田武一には以下のような著作物もあります。

①「大日本歴史地図」／明治 28 年刊。

②「新撰假名遣捷径（しんせんかなずかいしょうけい）」（近藤文庫 196）／明治 29 年 12 月刊／仮名文字の使い方の解説書。

③「瀧鶴臺先生及び其の家庭」（県立山口図書館蔵）／大正７年刊／山口県美祢郡教育会編。

富田は、明治28年8月、山口中学校徳山分校に教諭として赴任し、同33年4月同校が徳山中学校となると、大正5年（1916）11月まで同校に勤務しています。徳山中学離任後、大正8年5月まで岩国高等女学校の校長兼教諭、そののち15年4月までは豊浦郡立豊浦高等女学校（のち山口県立長府高等女学校）の校長兼教諭を務めています。岩国高女では運動会の開催や校旗・校歌の制定、豊浦高女でも校歌・校旗・校章の制定や洋服の制服の採用など、大きな業績を残した校長として高く評価されています。豊浦高女では精神教育・情操教育の一環として小林一郎「こころの力」（成蹊出版発行）による指導を行い、毎朝そのレコードを聴かせたといいます（参考：『山口県立徳山高等学校百年史』『岩国高等学校九十年史』『長府高等学校六十年史』）。

富田は豊浦高女退職後、大正15年4月より東京で公爵毛利家特別職員となり、両公伝編纂事業（幕末維新期の毛利家当主敬親・元徳の伝記編纂事業）に従事し、伝記執筆を担当しましたが（毛利家文庫19日記64「記録課日記」）、昭和7年に亡くなっています。

富田は、徳山中学では国語・漢文・作文・修身などを担当する教諭でしたが、歴史地理に関する著作（コラム参照）もあり、晩年には両公伝編纂に関わるなど、歴史や地理にも深い知識をもった人物でした。若い頃、近藤清石に就いて国学・歌道を修め、一時東京の国学院でも学んでいます。また、岩国・豊浦両高女で校歌制定に尽力したように、学校教育における音楽の重要性も強く認識していた人だったかもしれません。

作曲者の大橋純二郎は、京都出身、明治32年2月～33年12月、県師範学校の助教諭を務めた音楽教師です。同29年8月、県師範学校に東京音楽学校卒の元橋義敦が初の音楽専門家として赴任しました。この元橋の後に赴任したのが大橋でした。のち、静岡県師範学校に転任しています（参考：梶田清七『山口発信　唱歌の航跡』）。

♪『防長唱歌』（一部）

第一　防長

一 大和島根の西の方 山陽道のはたてなる 周防長門の二国（ふたこく）のその地勢（くにがた）の雄々しさよ
二 東芸州石州の 境をなせる山脈は 八重垣なして久方の 雲井に高く聳えたり
三 鯨潮ふく日本海 浪立ちさわぐ響灘 北と西とを取りまきて 南は周防の灘ぞかし
四 東西三十九里余 南北三十里あまりにて 面積三百八十有 五方里ばかりなりとかや
五 北部もさのみ寒からず 南部も甚だ暑からず 天変地異は多からず 痩せたる土地は少なくて
六 狭田長田（さなだながた）に作る稲 中国米とむかしよりその名高きに改良を 加えて魚塩に富める国
七 海には汽船陸に汽車 運送交通便利にて 同じ日本帝国のうちにも多くはあらざらん
八 かかる幸福うくるわが 九十九万の同胞よ 君に国にと各の業（なり）をばはげみ勉めよや

第七　吉敷郡

一 郡界（ぐんざかい）なる鯖山を 下れば小鯖の禅昌寺 昔は西国の高野とて 今もその名ぞいと高き
二 音にきこえて鳴瀧の 泰雲寺にもたち寄りてくれば 氷上の橋近き 山手に見ゆる興隆寺
三 大内氏の氏寺と 栄えしかども名にも似ず 衰へ果てて本堂の 跡は山口農学校
四 御堀の里の外郎羹（ういろうこう） 名産なればあがなひて 鰐石見つつ鰐石橋 渡れば山口町ぞかし
五 山口はもと山口と いふ豪族のすめりしを 大内弘世ほろぼして 基開きしあとどころ
六 九代の孫の義隆卿 防長豊筑芸備石 七ヶ国を管領し 西国一 の大都会
七 その館址の古寺の 庭にのこれる豊後石 苔の筵の露ふみて 誰かむかしをしき忍ぶ
八 築山館のその跡は 築山八坂の社にて 夏のみ山と見し梢 海と見し池かたもなし
九 将軍足利義植の 滞在ありし御屋敷と いふ地は歩兵第四十二聯隊の兵営よ

※以下33番まであり

「県民の歌発表会（写真）」（広報課大型写真311）

文書館レキシノオト

「音」で読み解く防長の歴史

♪11

生活ノオト③

県民歌３代

【現在の県民歌（昭和37年制定）】

山口県では、これまで県民歌が3度作られています（昭和15年、26年、37年）。

右は現在の山口県の県民歌です。県政施行90周年と第18回国民体育大会開催にあわせて制定されました。作詞は佐藤春夫、作曲は信時潔です。

新しい県民歌のお披露目のため、昭和38年5月24日、山口国体にあわせて新築された県立体育館において「県民の歌発表会」が行われました（写真上）。宇部市出身の歌手三鷹淳が「山口県民の歌」を歌い、その後同氏による歌唱指導も行われました。

なお、国体開催にあわせて、県民歌とともに県旗も制定されています。

グラフ山口-山口国体216

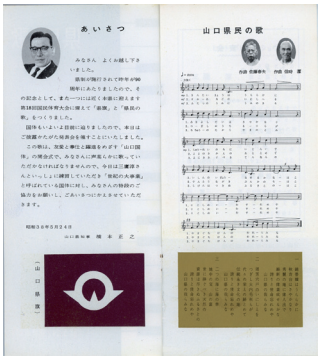
山口県民の歌

作詞　佐藤春夫
作曲　信時潔

1　錦帯橋はうららかに
秋吉台はさやかなり
秀麗の地に偉人出で
維新の偉業為せるかな
誇りと使命忘れめや
山口県の我らみな

2　周芳穴戸のいにしえを
つぎし大内毛利らが
代々の栄えの跡とめて
伝統永き文化の地
誇りと使命忘れめや
山口県の我らみな

3　二つの海に海の幸
地中の宝　山の富
世に捧ぐべき天然の
資源は尽きぬふるさとの
誇りと使命忘れめや
山口県の我らみな



「県民の歌発表会」（リーフレット昭和 38-26）

【初代県民歌（昭和15年制定）】

昭和15年、最初の県民歌が作られました。この県民歌の制定は紀元二千六百年記念事業の一つとして計画されたもので、懸賞をかけ県民から広く歌詞が募集されました。

600編の応募がありましたが、当選に該当する作品は無く、佳作10編が選ばれました。その中の一編をもとに、内容は山口県出身の文学博士渡邉世祐が、詞は文部省唱歌の作詞者の高野辰之が加筆訂正し、歌詞を完成させました。作曲は信時潔に依頼されました（現在の県民歌の作曲者と同じ人です）。

歌詞は山口県の歴史を基調としたものとなっており、1番と2番が山口県の過去、3番が現在、4番が将来を歌っています。大陸への進出を歌う４番の歌詞からは、時代の雰囲気が伝わってきます。

山口県民歌

懸賞募集篇改潤 渡邊世祐
高野辰之 作歌
信時潔 作曲

1　豊浦の宮の故事しのび、
藩祖の訓代々に守りて、
百万一心結びも固く、
奉公の意気天地に満てり。
いざいざ仰げ御遺徳、
永久にかはらぬ御鏡ぞ。

2　幾百年の妖雲払ひ、
天日の光四海を照す、
維新の偉業翼賛の誉、
負持つ我等ぞ山口県民、
いざいざ仰げ指月山、
焦土尊王の精神を。

3　三面海なる天与の国土、
営む農商漁塩の外に、
新に興れる殷賑工業、
雲なす煙は二州になびく。
いざいざ仰げ水陸の、
産業文化の結ぶ実を。

4　西日本の玄関出でて、
指すは大陸亜細亜の空に、
共存共栄心に期して、
正しき力新しき生命、
いざいざ仰げ諸共に、
築き上ぐべき大殿堂。

【２代県民歌（昭和25年制定）】

戦前の県民歌は終戦とともに廃され、これに代わり、昭和26年に新しい県民歌が制定されました。この時も歌詞が募集され、482点の応募がありました。選考の結果、岩本邦子と清川妙による２作品が甲乙つけがたかったため、「県民歌A」・「県民歌B」として、両者ともに県民歌となりました。

歌詞に続き、曲も募集されましたが、こちらは該当作品が無く、2曲とも防府市在住の作曲家大村能章が曲を付けました。

この時期、他県でも戦前に定められていた県民歌が作り替えられていますが、共通して、「希望」、「平和」、「夢」、「光」などのキーワードが含まれています。戦後間もない時代の雰囲気が感じられます。

山口県民歌A

作詞　岩本邦子
作曲　大村能章

1　朝だ大気をいっぱい吸って
行こうよ野良へ工場へ海へ
働く者の郷土を作る
そうだ希望だ山口県だ
みんな一緒にがんばろう

2　瀬戸のうちうみ船あし軽く
長門の浦の夕日も赤い
たのしい平和な日本を作る
そうだ希望だ山口県だ
みんな一緒にがんばろう

3　明治維新のあの父祖達の
熱と力を今この腕で
生まれかわった世界をつくる
そうだ希望だ山口県だ
みんな一緒にがんばろう

山口県民歌B

作詞　清川　妙
作曲　大村能章

1　波かすむ瀬戸の島より
潮騒の北海かけて
やまかはの清けき山口
白きみかんの花咲く丘に
あかるく希望の虹はたつよ

2　豊かなる　山幸　海幸
こころ燃え働く人ら
あらたなり伸び行く山口
防長の名のかほる野の上
高く建設の旗がなびくよ

3　戦ひすてたる民の
命もて築かん楽土
夢あれよふるさと山口
あふぐみどりの山脈の空
今か平和の鐘もひびくよ

【愛唱歌】

県民歌とは別に、県の愛唱歌として、昭和38年に「のばせ山口」が、昭和54年に「みんなのふるさと」が作られました。

「のばせ山口」は橋本正之知事の作詞で、作曲は阿東町（現山口市）出身で東京音楽隊長を務めた片山正見です。

「みんなのふるさと」は、平井龍知事の進めていた「あたたかいふるさとづくり」のテーマソングとして、歌詞が募集されました。533編の中から徳山市（現周南市）の国兼由美子の作品が選ばれ、作曲は山陽町（現山陽小野田市）の田村洋がこれにあたりました（リーフレット昭和35-1）。

文書館レキシノオト

「音」で読み解く
防長の歴史

♪12

「うたのほん　下」（教科書文庫16－26）

生活ノオト④

唱歌・音楽の教科書

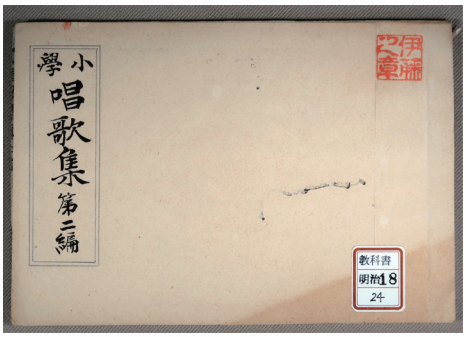
【小学唱歌集】（教科書文庫明治18-24）

明治5年（1872）の学制発布により国民皆学がめざされ、音楽教育についても小学校に「唱歌」、中学校に「奏楽」が設けられました。しかし、教材となる教科書はもとより、指導者も指導法も整っていなかったため、「当分之ヲ欠ク」と、その実施は見送られました。

学校における音楽教育をいかに進めたらよいか、その準備が本格化するのは、明治12年に文部省内に音楽取調掛（後の東京音楽学校）が置かれてからです。その任に当たったのは伊沢修二でした。彼は、西洋の音楽を取り入れつつ、従来の日本の音楽と融合させた、わが国独自の音楽の創設を目指しました。

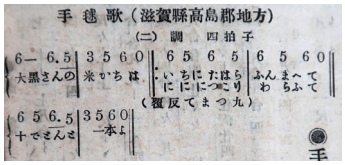
海外の音楽教育の視察や、お雇い外国人メーソンの協力を得て、ようやく出来上がった最初の唱歌の教科書が「小学唱歌集」です。明治14年に初編、16年に第2編、さらに17年に第3編が刊行されました。全92曲のうちの多くが外国の曲からメロディーを借り、それに文語調の歌詞をつけたものでした。

今もよく歌われている曲で言えば、初編掲載の「蝶々」はスペイン民謡、「見渡せば」（現在は「むすんでひらいて」の曲として有名）はルソー作曲、「蛍（蛍の光）」はスコットランド民謡です。第2編の「霞か雲か」はドイツ民謡です。



【尋常小学読本唱歌】（斎藤家文書77）

明治36年に国定教科書制度が定められ、各教科において順次、国定教科書が作成されましたが、唱歌については作成されませんでした。

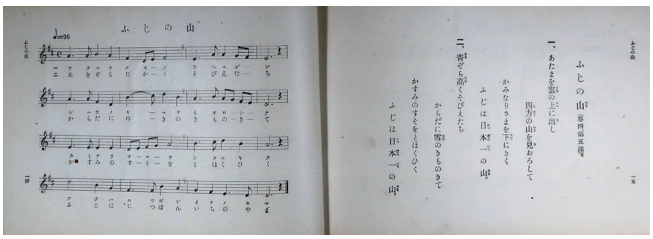


「数字譜」
（音楽雑誌第 56 号今井家 146）

明治から昭和前期の楽譜の中には、五線譜ではなく、数字で書かれたものがあります。これは「数字譜」と呼ばれ、数字で音階が表されています。

1……ド
2……レ
3……ミ
4……ファ
5……ソ
6……ラ
7……シ

高音には字の上に「・」を、低音には字の下に「・」を付けました。また、休符は数字の０で表しました。



明治43年、国定教科書に準ずるものとして「尋常小学読本唱歌」が作成されました。この中には「春がきた」、「ふじの山」、「われは海の子」など、現在私たちが「唱歌」と聞いて思い浮かべる曲が収められています。先に出された、「小学唱歌集」とはことなり、ほとんどが、日本人の作曲家により新しく作られた曲でした。

【「尋常小学読本唱歌」と「尋常小学読本」】

ところで、この唱歌の教科書は「尋常小学読本唱歌」と、少し違和感を覚えるタイトルとなっています。一方、「尋常小学読本」という国語の教科書もあります（河崎家文書3329）。

実は、「尋常小学読本唱歌」に載せられた唱歌は、「尋常小学読本」で学習する内容と一致しています。例えば「尋常小学読本唱歌」の「ふじの山」（写真上）には「巻四、第五課」と書かれていますが、これは「尋常小学読本」の4巻の第5課の学習内容（写真左）に対応していることを示しています。

このように、「尋常小学読本唱歌」は、歌を歌として楽しむというよりは、「尋常小学読本」を学習する上での補助教材と位置付けられていました。

この時期、様々な唱歌が作られました。明治34年に山口県師範学校が発行した「新編唱歌萃錦」には1300を超える曲が収められていますが、それらは「儀式唱歌」、「修身唱歌」「地理歴史唱歌」「四季唱歌」「遊戯唱歌」などに分類されています。

徳目習得や知識習得の手段の一つとして、文章を覚えやすいメロディーにのせて口ずさむのが唱歌でした。

「尋常小学読本唱歌」は、翌明治44年刊行の「尋常小学唱歌」へ引き継がれ、私たちのよく知る文部省唱歌となります。

【唱歌と童謡】（教科書文庫大正15-3）

「唱歌」と「童謡」は混同されがちですが、「童謡」は、「唱歌」が徳目や知識習得の手段に偏り、芸術性に欠けた点を批判し、子供たちに新しい歌を与えようとする「童謡運動」から生み出されたものでした。

この動きは大正期に見られ、北原白秋、野口雨情、西条八十らの詩に、弘田龍太郎、山田耕筰、中山晋平らが曲を付けました。左の史料は「ハクビ小学唱歌」です。その詩の多くを書いている海野厚は、この時期の童謡作家の一人で「背くらべ」や「おもちゃの兵隊」など、今も歌い継がれている童謡を残していることで知られています。

【山口県小学唱歌】（滝口明城文庫705 ～ 711）

「山口県小学唱歌」は昭和5年に、山口県教育会が唱歌の教科書として尋常科、高等科各学年1巻ずつ刊行したものです。唱歌には国定教科書が無く、文部省の検定を受けた教科書、もしくは文部省編纂の教科書から選ぶか、それ以外の曲を教室で教える際には、道府県知事の認可を得なければなりませんでした。この「山口県小学唱歌」により、唱歌選定の手間が省かれ、県内の各小学校における唱歌授業の統一が図られました。

【国民学校の音楽の教科書】

（教科書文庫昭和16-25･16-26･17-42･18-63 ～ 65）

昭和16年、尋常小学校は国民学校初等科と改称されました。唱歌は芸能科音楽となり、教科書も初めて国定となりました。戦時下の影響を受けた内容となっており、戦後になって墨の塗られたものもあります。

滝部神社郷社昇格願添付周辺見取図（「県社以下神社」県庁戦前B666）〔昭和4年〕

文書館レキシノオト

「音」で読み解く防長の歴史

♪13

生活ノオト⑤

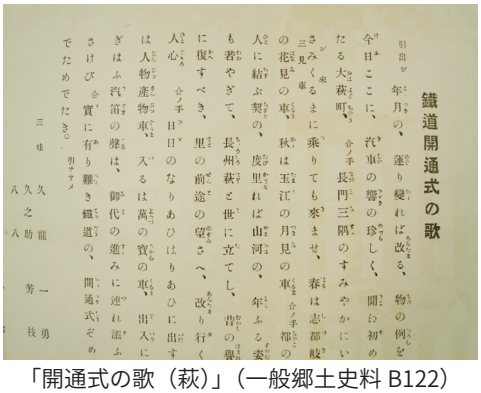
耳を澄ませば聞こえてくる！

【鉄道開通時の滝部のにぎわい（昭和初期）】

阿川毛利氏が信仰を寄せた滝部八幡宮の社格昇格申請に添えられた絵図面からは、にぎわう滝部の音風景を見て取れます。鳥居前を行き交う人々、自動車、荷車。街路の音が聞こえてきます。煙を吐きながら滝部駅に向かう機関車、駅の給水塔、駅に集う人々も描かれています。地元出身の中山太一（クラブ化粧品の中山太陽堂創業者）の尽力で滝部に念願の鉄道が開通したのは大正14年（1925）8月。地元商工会主導で発行された「豊北名勝案内附滝部沿革志」（一般郷土史料B240）などの冊子や鳥瞰図には、下関と直結されることになった滝部の未来予想図が明るく描かれています。

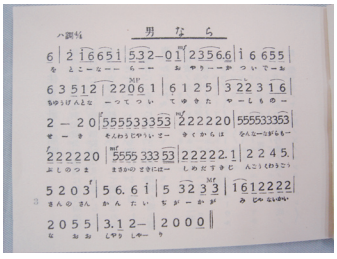
響灘沿岸地域における鉄道の延伸北上に大きな力を発揮したのが、小串出身の衆議院議員大岡育造です。その政治的基盤であった政友会は「我田引鉄」を前面に押し立てて、地方への鉄道敷設と引き替えに集票を企てました。こうした利益誘導的な政治手法には批判もありましたが、近代化を待ちわびた地方の人々にとって、「鉄路の響き」はまさに近代への夢の架け橋だったのです。昭和3年、下関－滝部間の小串線はさらに阿川まで延伸されました。この時制作されたのが「省鉄長門線鉄道唱歌」や「鉄道開通祝賀の歌」（ともに展示品参照）です。耳馴れたフレーズにのせられた歌詞には、沿線の奇勝景観のみならず、地域の歴史や未来像が、溢れんばかりの期待感をこめて、ドラマチックに、そしてリズミカルに読み込まれていたのでした。

鉄道の部分開通のたびに、各地で歌や踊りに彩られた盛大な式典が催されました。



鐵道開通式の歌

「開通式の歌（萩）」（一般郷土史料 B122）

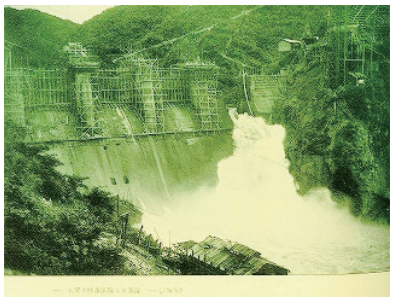


「萩の民謡」
（一般郷土史料B 110）
萩市観光協会発行

昭和 10 年の「萩の史蹟名勝と産業大博覧会」開催時に作製されたものと思われます。「男なら」「住吉神社のお船唱」「萩小唄」などの俚謡に加えて、市内の観光名所を余すところなく読み込んだ「夢の萩街」などの歌詞や数字譜が掲載されています。パステル調の色彩が印象的な表紙には、萩の象徴「夏みかん」が描かれています。

史料にひそむ近代の音あれこれ

▲1「波と船の音」



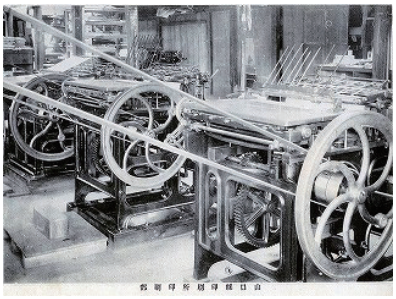
▲2「ダムの音」

▲3「せめぎあう人工物と自然景観」

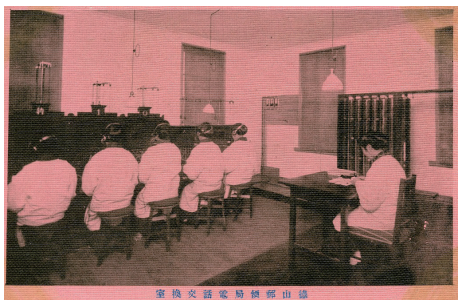
▲4「万歳の声」

▲5「演説の声」

▲6「激励の声」

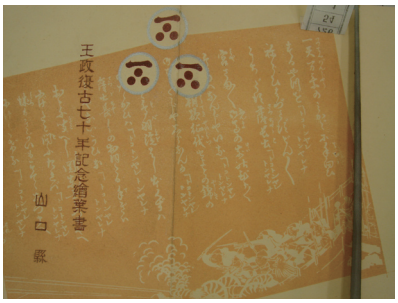


▲7「職場の音①」（印刷）

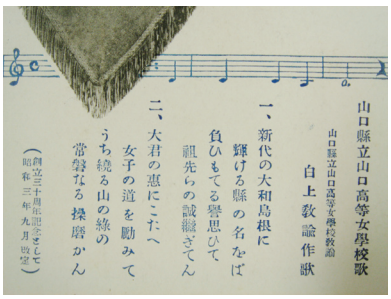


▲8「職場の音②」（電話交換）

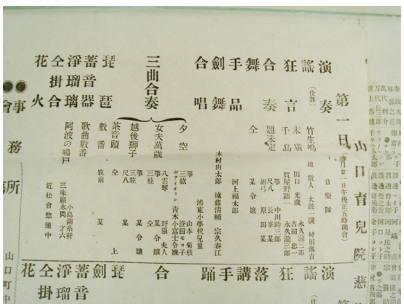
▲9「音と絆」（サークル活動）



▲10「防長精神の音」



▲11「校歌」



▲12「チャリティーの音」

1）秋穂二島村真照寺位置図〈「明治28年古社寺調査」県庁戦前Ａ社寺123〉 2）向道ダム〈「錦川利水工事記念写真帳」山口市山本家文書11〉 3）惣郷橋梁〈「萩線建設概要」三村家文書３〉 4）松崎小学校〈「大正天皇皇后行啓記念写真帳」剣持家文書512〉 5）田中義一演説〈行政資料＊戦前内務部164〉 6）県庁職員出兵壮行会〈久幸虎雄文書374〉 7）山口県印刷所の機械〈「県印刷事業創立十周年記念写真帳」一般郷土史料B78〉 8）徳山郵便局電話交換室〈雨村家文書266-3〉 9）防長音楽協会発会式記念写真〈剣持家文書584〉 10）王政復古七十年記念絵はがき〈文書館図書726-54〉 11）山口高等女学校創立卅周年記念絵はがき〈雨村家文書330-1〉 12）山口育児院慈善演奏会式次第〈河野家文書513〉

文書館
レキシノオト
「音」で読み解く
防長の歴史
♪14
生活ノオト⑥

「経済更生を基調とせる更生訓村訓村歌民謡類集」
左：〔経済更正叢書第14編〕（官省公報類509）〔昭和9年10月、山口県内務部〕
右：〔経済更正叢書第34編〕（官省公報類508）〔昭和12年6月、山口県経済部〕

団結の音

【「経済更生運動」の音】

昭和恐慌のもたらした経済的な閉塞状況を打破すべく、政府（内務省・農林省）主唱で展開されたのが「時局匡救（きょうきゅう）政策」と「経済更生運動」であり、主として農村の立て直しにフォーカスがあてられました。

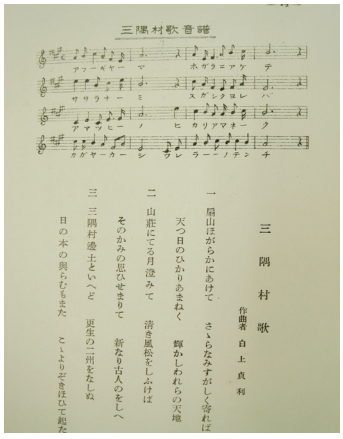
時局匡救事業は、土木事業に資金を投入して雇用を創出、そうしてもたらされた収入による農村の経済的な復興をねらったものです。大規模な道路改修、河川改修が実施されました。

一方で「経済更生運動」は精神的な側面が強く、真摯に日々の労働に取り組むこと、倹約を美徳とすることなど、「自力更生」が強調されました。そして、労働の共同化が色濃く打ち出され、やがては人心統制の領域に人々が躊躇なく足を踏み入れることにつながり、後の総動員態勢への序章となってしまったとも言われています。

「農山漁村経済更生計画樹立方針」の下、経済更生運動が始められたのは、昭和7年度のことです。県下では、昭和11年度末までの5年間に全市町村での計画樹立が目指されました。昭和7年に表明された「産業五ヶ年計画」に沿ったかたちでの「経済更生運動」の展開が期待されました。つまり、「経済更生計画の樹立」＝「経済実態の把握」＝「経済統制」という図式が描かれていたということなのです。昭和12年6月以降の第二期更生計画樹立推進期間においては、国民精神総動員運動に即応した「よりいっそうの民心作興」を盛り込んだ計画樹立が求められることになりました。

このように経済更生運動には、精神的で窮屈な側面が強かったと言えるのですが、一方で、その理念を「親しみやすく接しやすく」表現することによって、人々の日常生活に浸透させる工夫もほどこされていました。「ウタウ」「ツブヤク」「ヨミアゲル」。「音」の効能が最大限発揮されることになったのです。音感を共有することにより団結を深めようとの意図を史料から読み取ることができます。

「更生訓」「町村是」「綱領」のようなストレートなものに加え、敷居が高くなく、かつ、



「三隅村歌」
（官省公報類 509）

経済更生運動推進の精神的な支柱として利用されたのが、「声」や「歌」など、「音」の響きが醸し出す一体感や高揚感でした。作詞にあたったのは農事組合長や経済更生指導員、そして訓導や教師でした。「意気込み」「目標」が高らかに唱えられていたのです。

平易な言葉や聞き慣れた節回しにのせて口ずさむことによって、目標や方向性を共有できるように、「更生歌」「町村歌」「民謡」「小唄」などがつくられました。

県が発行した更生計画樹立のためのテキスト（経済更正叢書）にも、郷土色を盛り込んで親しみやすく、町村や部落の行事や共同作業の場面で口ずさんだり踊ったりすることによって知らず知らずのうちに心がひとつになり「やる気」が起きるコンテンツとして「歌」が推奨されました。「手拍子揃へば気も揃ふ！」「自然人心融和統合！」「老若男女こぞって謳歌口誦！」「和気藹々のうちに更生への一大行進！」。「音」がもたらす一致団結のムードが期待されたのです。

【若者の歌】

右下の写真は、青年団活動のさまざまな場面で声を揃えて歌われた楽曲をまとめたものです。青年団月例会の式次第には、「国歌斉唱」に加えて「防長青年歌合唱」が掲げられていました。この「歌集」には、防長県民歌を手がけた東京音楽学校教授信時潔が作曲した「防長青年歌」、のちに多数の経済更生歌の制作にかかわることになる山口高等女学校教諭白上貞利作詞の「防長青年団歌」などが含まれています。歌詞には「百万一心」の文字が躍り、思想善導を意図した時代の影を否定することはできません。若者の社会的紐帯を生み出す装置として、集団での朗唱が重視されていたことがわかります。

戦後になると、歌声喫茶、喧噪の中でのシュプレヒコール、そして、フォーク、ロック、表現方法にちがいはあるにせよ、若者の祝祭には歌や音が欠かせませんでした。昨今、数万人規模で若者を動員する各地の「夏フェス」も同じ流れに位置する表現形態なのかもしれません。歌を介してひとつになる。現代の個人社会を生きる人々に、歌が安心感や連帯意識をもたらしているのかもしれません。

【団結の歌をうみだした人「白上貞利」】

白上は吉敷郡宮野村出身。山口県師範学校卒業後、山口県師範学校、大津高等女学校、山口高等女学校で教鞭をふるった国語教師。自身の書斎を「桜圃山房」と名付け文筆活動にあたっていました。青海島や須佐湾の観光案内書の執筆者としても刊行物にその名前が記されており、観光開発の関係で、横山健堂や高島北海との親交もあったようです。また山口高等女学校学芸部の指導者として、校友会誌『森の下蔭』の発行や、山口の方言調査にあたっています。

こうして蓄積された、地理・歴史・文化・風土など、白上の郷土にまつわる博識が、経済更生歌の作詞に反映されたのです。戦後になるとそうした知識は親和的な団結のよりどころとして校歌の歌詞などに活かされることになりました。

村歌・小唄の一例
「仁保小唄」（官省公報類509）

「山口県男女青年歌謡曲集」〔昭和7年6月〕
（行政資料1930年代市町72）

文書館 レキシノオト

「音」で読み解く
防長の歴史

♪15

「九州方面修学旅行日記」（香原家文書22）

生活ノオト⑦

旅と音　～旅日記に見る風景と音～

【旅のたのしみ】

社寺参詣を主な目的とした旅は、江戸時代に入って庶民にも浸透し、盛んになりました。明治時代以降、静養文化の流入と鉄道網の広がりにより、教養を深めるため、あるいは余暇を楽しむため、旅の目的は多様化しました。

移動手段の変化は旅の速度と可能性に大きな変化をもたらしました。とはいえ、現代のような高速交通機関はなく、往来には時間がかかります。道中の景色や土地ごとの風俗も旅の楽しみの重要な要素でした。

旅にあたっては、記録を作成する人も少なくありませんでした。内容には個人差がありますが、行程や支出にはじまり、道中の景色風物や風説、創作した短歌や俳句まで、さまざまなものが記録されました。

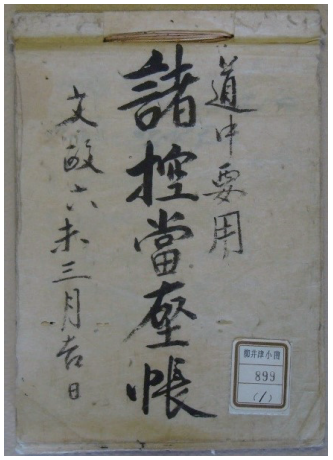
右のコラム写真は、江戸時代に作成された旅の記録のひとつです。当時の萩藩内の人びとの行き先としては、上方や九州が多かったようで、資料からは寺社参詣のついでに城や屋敷の見物、町々で行われる芝居や浄瑠璃などの興行も楽しんでいたことがうかがえ、音まで聞こえてくるようです。

【修学旅行と日記】

教員が学生を引率する旅行の始まりは、明治15年（1882）の栃木第一中学校（現栃木県立宇都宮高等学校）による、上野公園で開催された第2回内国勧業博覧会の見学旅行といわれています。その後の教育改革により行軍旅行が学習課程に盛り込まれ、明治20年頃から学術研修を兼ねた旅行として「修学旅行」の名称が使われていきました。

このような学校行事は、作文（綴方）の授業の格好の題材として、日記の作成、提出が求められることが多かったようです。

上写真は明治43年に福岡で開催された地方博覧会、第13回九州沖縄共進会に合わせ、5月3日から3泊4日の旅程で行われた山口中学校（現山口県立山口高等学校）の修学旅行にあたり書かれた日記です。授業の一環として作成されたものらしく、教員による添削や総合評価「意達文亦可観」（意達し文亦た観るべし、訳：意味が通っており、表現にもまたみるべきものがある）が朱筆で書き込まれています。



「道中要用諸控当座帳」
（小田家文書（柳井市金屋）899）

文政６年（1823）、現在の柳井市で町年寄などを務めていた商家の人物が、博多や太宰府、熊本、阿蘇を経て島原、長崎、唐津などを巡った後、萩、山口に立ち寄って柳井に戻るまでの道中の記録です。

全文が当館ウェブサイト内の古文書実践講座のページで公開されています。

【旅程と記述】

「九州方面修学旅行日記」の筆者は、道中の景色にも興味を持って接し、書き留めています。本文より、当時の中学生が感じた旅中の音を、風景描写と共に紹介します。

１日目：山口～香椎～箱崎～博多

①山口駅発
　家をも山を野も尚ほ温き夢を結びてか眠れるが如く、只聞ゆるは轟々として絶間なき車輪の音のみ。

②黒川堤
　…かしここゝの家々よりからからと雨戸開く音聞ゆ。朝食たくか、山の辺の賤が家に立ち上る煙いとしづかなり。

③小郡駅発
　汽車は勢よくも黒煙をはきつつ小郡駅を後にして、西へ西へと…

④下関～関門海峡～門司
　…九州を始めとし海外諸国への交通の要路にあたるを以てか、上下する客殊に多かり。…遠く日本海の方より吹き来る風颯々として袂をはらひ、波舷を打ちて水煙八方に飛び散る勢にて、かしこには黒煙吐く大船の荒波蹴立てて西の方に行くよと見るや、幾艘も幾艘も連り続きたる帆船の彦島~~影~~【かげ】より現はれて、悠々と風に任せて進むもあり、…

⑤香椎宮
　境内大樹老木鬱蒼と生ひしげり、頗る神~~仙の~~【々しき】地なり。

⑥箱崎町付近
　一望涯みなく黄金色の絨氈をしきつめたるが如く芳香軟風のまにまに~~鼻に~~【身辺】迫り、雲雀は此の好景をわがもの【がほ】に~~せんと~~中空に囀る。嗚呼春は長閑なり。

⑦東公園
　閑静の別天地、~~当地~~【山口】亀山の如きと比すべくもあらず、…

⑧共進会（夜）
　余興場に到れば…みなそれぞれの装飾を施し、見物人各会場に満つ。…市街の繁盛なるを観て帰途につく。

２日目：共進会、西公園

⑧共進会（昼）
　…獅子の吠え声にひかされて動物会に入る。

⑨西公園
　今松吹く風穏かに磯打つ波静かなり。

３日目：太宰府周辺

⑩水城跡
　水城の跡を見て懐旧の情車輪と共に回転し、…

⑪太宰府天満宮
　そこここゝの茶店より名物梅ヶ枝餅をとなへて【客を】呼びとむにやかましき。
　涼しき池の辺に坐して糧つかふに、いつの間にか鯉は人ありと知りて群り来り、今に餌やなげらるるかとさわぎたてり。

４日目：福岡～八幡～下関～山口

⑫博多駅発
　汽笛一声と共に名残惜しき福岡の地を後にして…

⑬八幡製鉄所
　黒煙は濛々として天を蔽ひ、数多の工場よりは雷の如き音聞こえ、人為の致す所とも思はれず…先づ第一に導かれたるは鉄材製錬所にて、殷紅の鉄材遥か彼方より遠雷の如き音たてゝころがり来るよと見るや、絶間なく廻転せるルーラーの間に入り、轟々たる大音を発し、火花を四方に飛び散らして出づ。

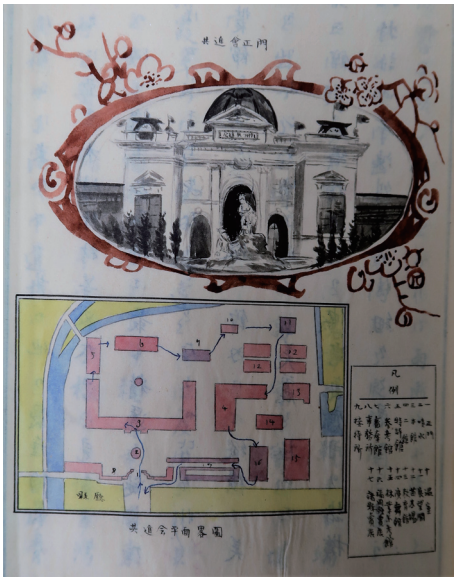
※【　】内は教師による添削。

当時、山口 - 小郡間には軽便鉄道が通っていました。朝5時半に山口駅（後の亀山駅、現中国電力山口支店付近）を出発します。早朝の静けさの中、汽車の音が響きます。人々が起きだして聞こえてくる音は、汽車以外に大きな音のするものがないことをうかがわせます。

下関では雑踏が描かれ、ターミナル駅の賑わいを感じさせます。関門海峡では風と波の音に加え、大小さまざまな帆船、汽船の行き交う音も聞こえてきます。

森閑とした香椎宮から箱崎までは、春の景色を楽しみながらの徒歩移動でした。東公園では県内屈指の（と当人は思っていたであろう）亀山公園と比較しているあたり、同園の佇まいにいたく感動したようです。

博多では、共進会と市街の繁盛に圧倒されたらしく、イルミネーションや装飾の美しさが言葉を尽くして説明されます。この共進会に合わせて開通した福博電気軌道（箱崎口-黒門橋／呉服町-博多停車場前）についての記述も多く、煙の出ない、新しい動力の乗り物に対する興味がうかがえます。



本人が描いた共進会場図

太宰府天満宮は現在よりも様々な音が溢れていたようです。「やかましき」と言われるほどの客寄せは現代ではなかなか想像がつきません。江戸時代以来の寺社参詣の賑わいがわかります。

最終日に見学した八幡製鉄所では、近代産業技術に圧倒された様が、繰り返される轟音の表現や、製鉄過程の細かな描写等からうかがえます。九州への旅は、穏やかな春の景色と名所旧跡を楽しみつつ、近代日本を体感する旅でした。

全編を通して、筆者は汽車の音を旅の音と受け止めていたようです。小郡から西へと向かうとき、博多から山口へと発つとき、旅の節目は汽車の音に彩られます。名所旧跡めぐりは過去へ、共進会や製鉄所の見学は未来へ、それぞれ思いを馳せる旅でもあります。回転する車輪の音は時間を巻き戻す音にも進める音にも聞こえたのかもしれません。

「四季耕作図」（早乙女らが田植えをしている後方で、男たちが囃しています）
（安部家文書1526）

文書館レキシノオト

「音」で読み解く
防長の歴史

♪16

生活ノオト⑧

仕事歌 ～田植え歌～

仕事歌は、仕事の調子を取ったり、共同作業の調子を合わせたり、単調な作業で辛気（しんき）な気持ちを紛らわしたり、あるいはもうひとがんばりの元気を出すために、ほとんどの仕事の場面で歌われました。これらの歌は民謡として残ることも多く、人々にはとても身近な歌でした。

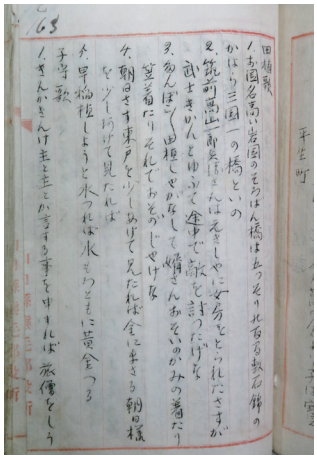
さて、『山口県の民謡』（山口県教育委員会、1982年）や自治体史にみえる民謡・労働歌は、公的な調査ということもあって、上品で、美しいものがほとんどです。しかし現実の仕事歌は、形式的なそれら美しいもののあとに歌う、にやりとするような猥歌や笑歌（「艶笑歌」）の部分を広く持っていました。そしてそれらの多くは、文字に残ることなく、永遠に消え去りました。

たとえば田植え歌は田の持ち主を称えるものや錦帯橋・宮島などの名所を歌うものなどが上記の文献に載っていますが、実際には、そのあとに男女の関係や性的なことがらをあからさまに歌う後半部分を持っていました。江戸時代後期の記録である「注進案」には、そのことをうかがわせる次のような記述がみえます。

・田植ハ（中略）催合（もやい）植仕、大歌と申おかしき歌を唄ひ入梅より半夏生を中にして植付申候（山口宰判上中郷）
・五月田植には村々にても催合にして睦敷（むつまじく）彼のざれ歌抔（など）親子兄弟の聞をも不憚（はばからず）唱ひつゝ植付（奥阿武宰判徳佐村）
・老圃考〔御代官所考〕曰、五月田植時はいづこもいづこも押並て親子兄弟相並びつゝも、男女の中らひの事白地（あからさま）に唱ひ出、其を肚（はら）恥かしとも思はずものするを、いかなる事にかと年頃知まほしく思ひをりしに、（同）

田植えは女性の仕事です。女性たちがそのような「男女の中らいの」歌（大歌・ざれ歌）を、親子兄弟が聞くのもはばからず大声で歌いながら植える風景は、さぞかし壮観だったことでしょう。また、女性であれば、なおさら公的な調査の場で歌ってくれることは少なかったでしょう。しかし、おそらくその「後半部分」こそが、つらい労働のなかには必要だったのだと思われます。

実は、『山口県の民謡』のなかの田植え歌には、そういった歌もいくつか収載されており、貴重な記録となっています（裏面）。



「熊毛郡郷土誌前・後編」
（熊毛郡役所文書 11）

大正８年（1919）に熊毛郡役所学務係が教育資料として作成した地誌。熊毛郡各村の概況や年中行事、仕事歌等を記録しています。

写真は平生町の「田植歌」の部分。ここでも岩国錦帯橋を「お国名高い岩国の　そろばん橋は五つそりの　百間敷石錦のかはら　三国一の橋といの」と歌っています（裏面参照）。

もっとも、村の旧家などで大規模な田植えをする場合には、冒頭の写真のように、

・余分植付仕候者ハ早乙女多人数相集め、胴取と号し男子壱人太鼓を打、歌を諷ふ、早乙女其歌に継き諷ふ、尤胴取之指揮ニ応し太鼓之拍子ニ随ひ植る（熊毛宰判三丘のうち八代村）

といった調子で、胴取りとの掛け合いで植えていたようです。

さらに進んで、田植え時には「青苗祝」と称して実際に「戯れ」ることがあったらしく、当局の厳重の沙汰によって禁止されている例があります。これが男女の戯れであろうことは、容易に想像できます。

・青苗祝と申戯れ仕候へ共近年厳重の御沙汰有之相止申候（前大津宰判深河村）

田植え時の男女の「高揚感」は、盆踊りの時と似たものだったかもしれません。

『山口県の民謡』の内容や歌詞は、現在の県社会教育・文化財課のWebページ「山口県の文化財」にある「民謡データベース」から検索して見ることができます。

http://bunkazai.pref.yamaguchi.lg.jp/folksong/

また、そのときの調査の音声は、山口県立山口図書館で実際に聞くことができます。

ここでは、その中から、田植え歌をいくつか紹介します。

田植え歌は、正条植の普及（明治後期）や農業の機械化とともに消えていきました。

今日のよい日のお田植はじめ
稲の万才御代の数ウー
早苗植えましょうまっすぐヨー
直（すぐ）は神様およろこび

今日のよい日のお田植はじめ
稲の万才御代の数ウー
早苗植えましょうまっすぐヨー

お国で名高い岩国の
そろばん橋は五そりに
百間敷石錦の川原(かわら)
三国一里のそり橋
お国で名高い岩国の
そろばん橋は五そりに
百間敷石錦の川原
三国いちのそり橋
お国で名高い岩国の・・・・・・

（以上が「親歌」の部分）

****

（以下が「大歌･ざれ歌」の部分）

父っさあお前の前の方で
ぶらぶらするのはありゃなんの
あれはわれらをこねくり出した
こね木の棒じゃがエー知らんの
ぶらぶらするのはありゃなんの
あれはわれらをこねくり出した
こね木の棒じゃがエー知らんの
父っさあおまえの前の方で・・・・・・
（繰り返し）

＊由宇町北区の女性（明治34年＝1901生)が伝承していた田植え歌

おいでおいでと　ヨーオ　手じゃ招かれぬ
歌の文句で　ヨーオ　悟りゃんせ

一度寝てみて　ヨーオ　寝肌がよけりゃ
妻と定めて　ヨーオ　寝にござれ

妻と定めて　ヨーオ　寝にくるからは
我身と思うな　ヨーオ　自由にならん

あなたみたような　ヨーオ　牡丹の花が
咲いております　ヨーオ　来る道に

シラサギみたような　ヨーオ　あなたに迷うて
カラスみたような　ヨーオ　苦労する

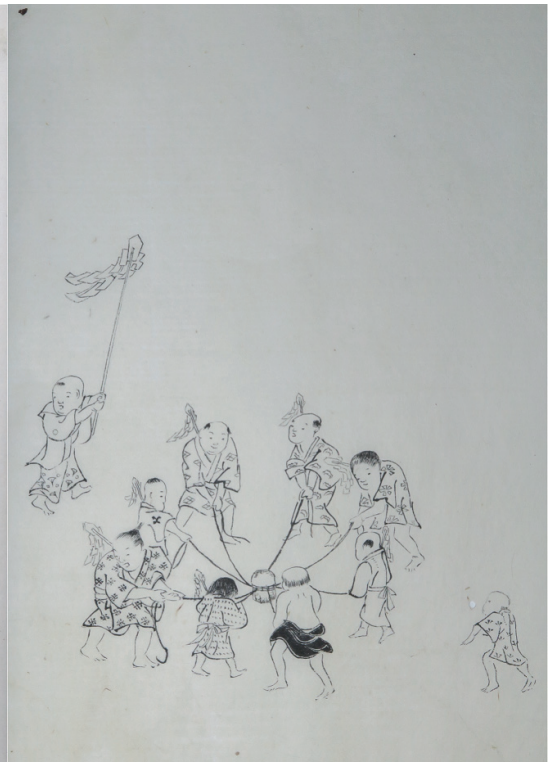
＊川上村野戸呂の女性（明治21年＝1888生）が伝承していた田植え歌

こよいござれば裏からござれ
前は車戸で音がする　ハーホイ
車戸で前は
前は車戸で音がする　ヤッタナー

あなたおもいに身は細りゃせぬ
思い出さずに忘れずに　ハーホイ
思い出さずに忘れずに　ヤッタナー

思うて通えば千里も一里
会わず帰ればまた千里
帰れば会わず
会わず帰ればまた千里

＊阿東町篠目の男性（明治30年＝1897生）が伝承していた田植え歌。夜這いをうたったもの。



文書館 レキシノオト

「音」で読み解く
防長の歴史

♪17

「防長風土注進案　殿敷村」（県庁伝来旧藩記録　風土注進案361）
左に描かれているのはいのこ石

生活ノオト⑨

年中行事の唱え言と唱え歌

毎年決まったように行う民間の行事には、その時々の「唱え言」や、その行事のときにしか歌わない「唱え歌」を伴う場合があります。ここでは、それらを区別せず、月日を追ってみていきましょう。

《七草（1月7日）》

七草を摘むとき、またそれを調理するとき、次のような決まった歌があったようです。

・唐土の鳥と日本の鳥が　渡らぬさきに七種をたゝいて歳徳様えあけふよ（「注進案」当島宰判河島庄）

《望の粥・成木責め（1月15日）》

成りものの木（果樹）の豊穣を祈る行事です。果樹に向かって、一人が斧で「ならねば切る」と脅すと、一人が「なりますなります」といって持参した粥を塗り込みます。

《とんど（1月14日）》

小正月の火祭りとして広く行われる行事（どんど焼き）。正月飾りや吉書（書き初め）を焼き、その火で正月餅の取り置きを焼いて食べました。ほとんどが1月14日（の夜）に行われ、その際子どもたちは「トンドヤ左義長　祝ひ之こけハ今朝迄　小豆餅ハすへりた」「どんどやさぎちやう　祝ひの賀儀ハ今朝迄」等と歌いました。

《といとい・とろへい（1月15日）》

子どもたちが夜、「トヘトヘ」等と唱えながら、銭差縄や藁で作った「トヘ馬」などと交換に餅をもらい歩くスリル満点の行事です。

・封縄弐本盆へ入レ、「トヘトヘ」と申、家々の戸口に来り候時、苻縄を取年徳神祝の餅一重遣し、（中略）子供へ墨を付水をかけ申候（小郡宰判上中郷）

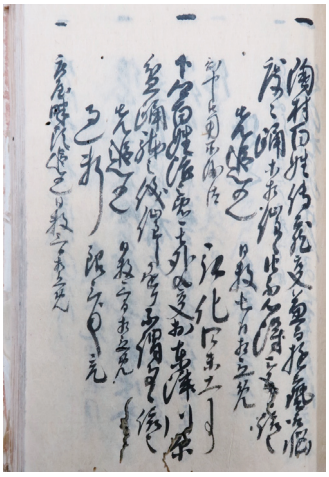
《麦ほめ（1月20日）》

作物をほめたり脅したりして豊穣を祈るという点では、「望の粥」等に同じ。麦畑に行き、「ええ麦じゃ、今年の麦はできがようて背中から腹へ割れるでよう」といった唱え言をしました。

《涅槃（2月15日）》

釈迦の入滅日の法会に伴う子どもたちの行事も「ねはん」と呼びます。送り火を焚くとき、「ヲシャカノシャカノブリンボウ」と大声で唱え（「注進案」吉田宰判今浦御開作）、また「勧進米をくれんものハ、箸で家を造って、味噌で壁を塗って、雨が降りゃべたべた、風が吹きやばたばた」

盆踊り



「古例便覧」
（山口小郡宰判記録 38）

盆踊りは太鼓の伴奏で、手をたたきながら踊るものが多かったようです。江戸時代には「思案橋」「国府節」「兵庫くどき」等が歌われましたが、当局によって禁止された時期がありました。幕末には「白河踊り」も伝わりました。仮装も多かったようです。

上の資料は、嘉永年間に小郡下郷の百姓治兵衛らが盆踊りを催した廉で「追込（おいこめ）」「過料」に処せられた記事です。

（「同」三田尻宰判三田尻町）と唱えながら貰った米で、粥を炊いて食べたりしました。

《節分（3月3日）》

節分の豆まきの作法として、以下のような詳細な記述が「注進案」にあります。大声で行うものだったようです。

・樒榊葉に大豆を交へ能々焙りて一応神棚え備へ、夫を卸して「エヘンエヘン」と咳払ひして「福は内」と小声にて三遍座敷を廻り、夫より「鬼は外ト」と大声に呼ハり呼ハり右之品を一ト間切りに蒔き散し候（奥山代宰判符谷村）

《虫送り（田植え後）》

毎年、または虫が発生する気配がある場合に行われた、稲の害虫を村外に送り出す儀礼です。藁等で武者や馬の形代や船を作り、田頭を担ぎまわった後に、隣村や川・海に送り出すのが一般的で、その行列は歌や唱え言とともに、鉦・太鼓・法螺貝から鉄砲まで持ち出された、たいへん賑やかなものでした。代表的なものを下表にあげます。

《いのこ・亥の子・玄猪（10月）》

いのこは10月亥の日に新穀餅を搗き、神や臼に供えて贈答し、子供たちは藁を束ねたものや丸い石に綱をたくさん取り付けたものを持ち、家々をはやしながら突き回り、餅や菓子を貰う行事です（冒頭写真参照）。子どもたちにとってはたいへんに楽しい行事でした。現在でもおこなっているところがあります。

そのときに歌う「いのこ歌」はさまざまな種類のものが数多く伝わっていますが、下表に「注進案」にみえる江戸時代後期のものをあげます。

村	「注進案」の虫送りの唱え言
奥山代宰判 阿賀村	詞にハ「北条とのハ陣たち、実盛とのハ御供立、夫ニ付て昆虫もシラテもヤエモ御供せよ、跡ハ富貴にそめいた、チウチウチヤア」と大音に呼ハり村中相済下畑むらへ送る
奥山代宰判 本郷村	已前は子供等多く付送り、「斉藤実盛篠原軍　北条殿ハ何とやら」呼ハり囃し喧しかりしか当時は其事無之
前山代宰判 金峯村ほか	途中大音ニ「サハア　サマア　ヂンタチ　サネモリ　ドノア　ヲトモシ　ヤアヽ　早蝿様陣立実盛殿御供」と呼ハり、花岡御才判境国木峠迄送り捨申候

村	「注進案」のいのこの唱え歌
奥山代宰判 本郷村	十月玄猪祭り農家町家共に餅を搗て贈答し、尚市中にてハ其夜男子も女子も打寄りて石を括り数本の綱手を付て、「亥ノ子亥ノ子、亥ノ子餅つきて祝ハぬ人ハ鬼を産メ蛇を産メ、角の生へた子を生メ」と囃し立、家々の戸口を搗き歩行き喧敷相聞候
徳地宰判 堀村	十月初亥ノ日いの神庭迄帰給ふとて庭え兼て苗代に稲を一株刈残置、此日取帰庭え臼を居、夫え稲を納めてもちひ濁酒灯明を奉り一夜庭を静かにす（是ヨリ三月節句迄ハ農神屋の内に止まり給ふといふ）童大きなる石え蜘手に縄を付門々をつく（口々に「猪の子餅をつかぬものハ鬼うめ蛇うめ角はへた子をうめ」と諷ふ）
吉田宰判 今浦開作	亥の子祭とて童子家毎に行、五文或ハ拾文宛繋之柚柿をかざり、石ニて餅の形地を作り、是ニ縄を付ケ亥の子餅祝んとて門ト毎に行て搗ク、又新嫁の家に行てハ子を産む事多かれとて搗事数多し、是全く豕（猪）ハ年に子を十二産といふ事を起りにて、古より亥の子祭りを右の通ニ仕来候由申伝へ候事　是を搗んとする時童子等口をそろへ、「コボンニコボンニサイコノボウイロイロニベヽキシテセドカラカドカラツヽパツタ」と大音にて謡出候事
前大津宰判 殿敷村	十月亥の日に古来より玄猪石と申候て鞠の如き石の真中に輪を掛候ものゝ御座候を小児等相集、町家の店を借これを壇上に飾り注連をはり幣を手向神酒餅柑類抔備申候、薄暮より右の亥の子石の鉄の輪に小児銘々縄を結ひつけ家々の外庭を突候、其時同音に云、「何かしどのおミまひまふす、今宵は亥の子いのこ餅をつかんものは鬼をうめ蛇をうめ角のはへた子をうめ、一ツ二ッ三ツ四ツ五ツ六ツ七ツ八ツ九ツ十ヨ、十でとつくりおさめた」、右の通の祝詞にて拍子をとり軒別残りなく突ありき夜四ツ頃各家にかえり候